

飛ばなかった特攻専用機

甘木市 手島 知加之

昭和19年10月4日、奈良市高畑町にあった岐阜陸軍航空整備学校奈良教育隊に入校した。地区軍少年飛行兵第17期乙種機関第1次生500名は、秋深み行く飛鳥野に、厳寒骨を刺す三笠山下の校舎に練武修文、そして航空機整備技術の習得に励んだ。

昭和20年2月、戦局の急迫により軍の学校も部隊として再編され、空565部隊となるとともに、われら1次生500名中200名は、航空機増産援助のため、東京都昭和町陸軍航空工廠に派遣を命ぜられた。また残余の300名は、金沢市にあった、陸軍航空工廠金沢分廠に派遣された。3月2日、私も同期200名と共に武蔵野の土を踏んだ。

あっぱれ航空整備技術を修め、あわよくば、機上機関係として天翔ける夢を果たしたいとの念願も空しく、すでにわれらを教育して整備させる飛行機等は見えなかったのである。

着廠8日目、有名な東京大空襲を経験したといっても、東京と工廠は相当な距離があり、直接投弾を受けることはなかったのであるが、3月9日、夜更けるとともに、炎々たる大火災は、隣家の火災の如く、工廠周辺も真昼のごとく照らし出された。ルメイ少将指揮のマリアナ基地を飛び立ったB29、300機の波状攻撃である。武蔵野嵐たける中、天を焦がす猛火。

次々と来襲する敵の機影も鮮やかに望見され、中には紅蓮の炎を引いて撃墜されるものもある。

ああ、あの下には多くの同胞が逃げまどい、業火の中にもだえているのであろう。非戦闘員、老幼の別なき無差別爆撃の暴挙と見ながら、航空の一員である身の何の抵抗もできぬ口惜しさ、航空戦力なき国のみじめさを骨の髄から味わったあの夜のことは、50年を隔てた今も忘れることはできない。

航空工廠も資材不足からまとまった仕事もせず、教練や雑用に日を過ごす中、沖縄の失陥も近づいた6月半ばより第三工場に於いて、特攻専用機、キ115の機体の製造を行うことになった。本機は、本土決戦用の特攻専用ということで胴体はブリキ張り、計器板にはブースト計、速度計等2、3しか装備されておらない実に淋しいものであった。

更に脚は、パイプに車輪をつけただけで油圧による緩衝装置もなく、しかも離陸すれば切り落として、更にこれを使用しようということであった。一旦離陸すれば着陸はできない仕組みで、本当に必死の飛行機であった。

エンジンは中島8115、星形14気筒、1100馬力装備ということで速力は時速500km、爆弾250kgを装備、機銃なしであった。

毎日鉄でブリキを切る単調な作業をつづけながら、戦局もいよいよ、来るところまで来たと思った。戦局の要請といえ、こんな飛行機を作らねばならない国の資源の貧弱さ、工業力の低下を切実に感じさせられた。

しかし、それにも増してこの飛行機を操縦する搭乗員の心中を惟うとき、まさに身を切られる思いであった。搭乗するのも、われらと同じ少年飛行兵であろう。前途春秋に富む少年の身を以て、ただ国難に殉じようと、学業を捨て、家族を捨て、志願してきたわれらの同志に与えられる飛行機がこの115であろうとは。

一度飛び立てば帰還はおろか、機銃1挺の武装さえない飛行機では、敵戦闘機の好餌となるのは目に見えている。

戦況は益々悪化し、区隊長の朝毎の訓示も敵の九州上陸近きこと、次は関東上陸であろうから、各々は常に身边を清くし、いつでも美しく死ぬるように準備せよ、というような調子になって来た。

工廠の作業も、毎日の空襲警報でほとんどされない日が続きながらも、その合間を縫ってキ115の生産はつづけられた。

8月に入り、広島、長崎への原爆投下、ソ連参戦と騒然たる日々がつづくとき、8月15日正午、工廠広場に全員集合を命ぜられ終戦の詔勅を拝し、更に米軍厚木進駐を控え、首都圏所在航空部隊の復員が急がれ、8月20日立川駅をはなれ、復員兵ひしめく東京駅を経て無蓋貨車で雨降りしぶく東海道、山陽道を西下、焼ケ野原と化した都市を見、雨にぬれた身を乾かす術もなく、「吾れ敗れたり」の実感をしみじみと味わった。

キ115のその後の状況等の文献をさがしたが、なかなか見当らず歳月は流れた。

最近になって漸くその全容を知り得た。103機製造されたが、実戦には余りに危険な飛行機の故に、遂に採用されなかったということを知り、われらが仕事が無駄になったことを心の底から喜んだ。

当時工廠には女子挺身隊、動員学徒が多く働いており、中には小学生かと思ましがう少年少女もいた。遊びたい盛りであろうこの子供達まで工場にかり出さねばならない国の状況にも日々、涙を新たにしたものがあった。

あの日から50年、当時のうら若い女性達も、いたいけな少年少女達も、今は老境に向かっているであろう。心からその多幸を念ずるとともに、空爆に死し、異国の地に眠る多くの同胞の冥福を祈って止まない。